

正法眼蔵『有時』

Shōbō-Genzō “YŪJI”

矢島忠夫*
Tadao YAJIMA*

要旨

本考は、『正法眼蔵』を精読する。とりわけ、論理語に留意し、道元がどのように思考していたのか、その流れが理解できるように表現することを目指す。修正可能な素案を提示することが課題である。

キーワード：有時、經歷、吾有時、現成公案、向上関捩、脱体、即此即離、半有時、錯有時、錯々有時

『有時』(1240)は、「時すでにこれ有なり、有はみな時なり」、「時は飛去するとのみ解会すべからず」「有時に經歷の功德あり。いはゆる今日より明日へ經歷す、今日より昨日へ經歷す」と言う。

時がすでに有であり、有がすべて時でありうるのは、時とは、つねに、あれこれの行為をしている時であり、あれこれの出来事が生起している時であるからだろう。時は、たとえば、雪が降っている時であり、傘を差している時である。雪の時とは、(雪が)舞っている時であり、積もっている時である。傘の時とは、(傘を)差している時であり、(傘が)回っている時である。自己自身と同一している実体的なものに、何々している時ということが起こることはありえない。かりに、雪の時、傘の時と言われるにしても、それは、実体的なものである雪や傘の時ではありえない。時は、つねに、行為の時、出来事の時であり、いわば、飛び雪の時、開き傘の時である。あるいは、行為や出来事が、そのまま時であり、時が、そのまま行為や出来事なのである。有が時であり、時が有でありうるのは、その有が、自己自身と同一している実体的なものではなく、自己自身と差異している出来事や行為であるからだろう。

自己自身と同一している実体的なものが存在しているのではなく、自己自身と差異している出来事が生起しているということは、行為する主体が、出来事としての行為や、その行為において生起している出来事と別に、自己自身と同一している実体的なものとして存在しているわけではないことである。「一切の衆生は

悉く仏性を有している」と読まれる「一切衆生悉有仏性」は、『仏性』(1241)では、「一切の衆生は悉有であり、悉有は仏性である、ゆえに、一切の衆生は仏性である」と読まれる。「仏道修行するすべてのもの(衆生)は、仏道修行しているその行為において生起しているすべての出来事(悉有)と別のものではなく、その出来事(悉有)が、仏である証し(仏性)である」、したがって、「仏道修行するその行為こそが、仏である証しであり、仏道修行する行為のほかに、仏である証しはない」と言っているものと理解される。⁽¹⁾『有時』も、「仏道修行者にとっての有る時は、仏道修行者自身が行為している(有る)時であり、その行為と一つのこととして生起している(有る)出来事と別ではない」と言うようである。

時が、「飛び去るだけでなく、經歷する力がある」のは、同じように行為しているものには同じような出来事が生起しているからであり、同じように行為しているものは同じ時を生きることができるからである。すべてのものを過ぎ去らせ、断絶させる時間が圧倒的な威力を発揮している世界において、仏法が同じ一つの法として伝えられ、同じ強度で反復されることを可能にする行為の仕方、そのようにして仏法の歴史性を可能にする時間が問われているのだろう。

1 時は有る、有るのは時である

[1-1-A] 古仏のたまわく言、
ゆうじこうこうほうちようりつ
有時高々峰頂立、
しんしんかいていこう
有時深々海底行。

*弘前大学教育学部社会科教育講座

Department of Social Studies, Faculty of Education, Hirosaki University

有時三頭八臂、
 有時丈六八尺。
 有時拄杖扠子、
 有時露柱燈籠。
 有時張三李四、
 有時大地虚空。(2)

[1-1-B] 古仏は言われました。[仏道修行に]
 有る時は、高々と峰の頂に立ち
 有る時は、深々と海底を行く
 有る時は、頭三つ腕八つ [の阿修羅として有り]
 有る時は、立って一丈六尺坐って八尺 [の仏として有る]
 有る時は、拄杖や扠子 [として専心指導し]
 有る時は、露柱や燈籠 [として専心修行する]
 有る時は、Aさん、Bさん [として有る]
 有る時は、大地、虚空 [として有る](3)

[1-1-C] 仏道修行者にとっての有る時は、仏道修行者自身が行為している(有る)時であり、その行為と一つのこととして生起している(有る)出来事と別ではない、と言っているようである。

*

[1-2-A] いはゆる有る時は、時すでにこれ有なり、有はみな時なり。丈六金身これ時なり、時なるがゆゑに時の莊嚴光明あり。いまの十二時に習学すべし。三頭八臂これ時なり。時なるがゆゑにいまの十二時にいちよいかなるべし。十二時の長遠短促、いまだ度量せずといへども、これを十二時という。去來の方跡あきらかなるによりて、人これを疑著せず、疑著せざれどもしれるにあらず。衆生もとよりしらざる毎物毎事を疑著すること一定せざるがゆゑに、疑著する前程、かならずしもいまの疑著に符合することなし。ただ疑著しばらく時なるのみなり。

[1-2-B] 有る時と言うのは、時はすでに有るので、有るのはどれも時なのです。立って一丈六尺坐って八尺の金身は[仏として有る]時です。時なのですから、時[につきもの]の嚴かな飾りや明るい光があるのです。わたしたちの[子丑寅卯辰巳などと言う]十二の時に習って学びなさい。三頭八臂は[阿修羅として有る]時なのです。時なのですから、わたしたちの十二の時と違いがないはず。これまで十二の時の長さや短さ、遠さや近さを量ったわけではないのですが、十二の時と言っているのです。[ネズミの時が去ってウシの時が来るといふように][十二の時が]去って行くところややって来るところがはっきりしている、人はこれを疑わない[だけな]のです、疑わないからと言って知っているわけではないのです。そもそも人は知らな

いことやものをかならずしもすべて逐一疑うわけではありせんから、これから疑うことが今疑っていることと一致するとはかぎらないのです。ただその時しばらく疑ってみるだけなのです。

[1-2-C] ネズミ(で有るもの)が時であり、ウシ(で有るもの)が時であることを認めるのなら、それに習って、三頭八臂(で有るもの)が時であること、丈六八尺(で有るもの)が時であることも学べるのではないか、と言うようである。しかし、ほんとうに、ネズミの時が去ってウシの時が来るのか確かめて見たのか、ネズミの時が去ってウシの時が来るように、阿修羅の時(阿修羅として有る時)が去って仏の時(仏として有る時)が来ると考えてはいけないのではないか、ここでしっかり疑ってみなければならぬ、と言うのだろう。

*

[1-3-A] われを排列しおきて境界とせり、この境界の頭々物々を、時々なりと觀見すべし。物々の相礙せざるは、時々相礙せざるがごとし。このゆゑに同時発心あり、同心発時なり。および修行成道もかくのごとし。われを排列してわれこれを見るなり。自己の時なる道理、それかくのごとし。

[1-3-B] わたしを排べ列ねておいてそれを全世界としているのです、[ですから]この全世界の一つ一つのものねらって、それぞれを[わたしを排べ列ねた]時だと見なければいけません。ものものが礙げあわないのは、時と時とが礙げあわないようにしてです。ですから、[異なるものが]同時に[仏道修行する]心を発することが有るのです、[それは]同じ[仏道修行する]心が発する時なのです。さらに、修行し仏道を実現するものこのようにするのです。[つまり]わたしを排べ列ねてわたしが見ているのです。自分が時である道理は、こういうことなのです。

[1-3-C] 行為するわたしと、わたしの行為が一つのものであり、それらがその行為において生起する出来事と別でないこと(道理)が理解できれば、行為がなされるその時々生起する出来事を見るわたしは、その出来事がそこにおいて生起しているその時々わたしの自身の行為を、したがって、そのように行為するその時々わたし自身を見ているのであるということ(道理)も理解できるはずだ、と言うのだろう。

*

[1-4-A] 憊麼の道理なるゆゑに、尽地に万象百草あり、一草一象おのおの尽地にあることを参学すべし。かくのごとくの往來は、修行の発足なり。到憊麼の田地のとき、すなはち一草一象なり、会象不会象な

り、会草不会草なり。正当恁麼時のみなるがゆえに、有時はみな尽時なり、有草有象ともに時なり。時々の際に尽有尽界あるなり。しばらくいまの時にもれたる尽有尽界ありやなしやと観想すべし。

[1-4-B] そういう道理ですから、[仏道修行する]すべての地に[仏として有る]あらゆる象あらゆる草が有るのです、どの草もどの象も[仏道修行する]すべての地に有ることを(修行の場に)参えて学ばなければいけません。このような地を往き来するのが修行の第一歩なのです。このような田地に到る時が、つまり、一つの草[が有る時]であり一つの象[が有る時]なのです、[この地を離れず]象を理会するのです、[この地を離れて]象を理会しないのです、[この地を離れず]草を理会するのです、[この地を離れて]草を理会しないのです。まさにこのような時だけなので、[仏道修行して]有る時のどれもが[仏として有る]すべての時なのです、有る草も有る象もともに[仏道修行して有る]時なのです。[仏道修行する]時々の際に[仏として有る]すべての有るもの、すべての世界が有るのです。ここでしばらく、[仏として有る]すべての有るもの、すべての世界で、[仏道修行する]今の時にもれているものが有るかどうか想い観てごらんください。

[1-4-C] 出来事[尽界]を見ることは、それと一つの出来事として生起している自分自身の行為を見ることである。出来事は自分自身の行為において生起し、この行為の力量は出来事において実証されるのであり、その時々自分自身の行為を離れて出来事はないからである。そのように、草を見ることは地を見ることである。成道(草)は修行する行為(地)において生起し、修行する行為(地)の力量は成道(草)において実証されるからであり、修行するその時々自分自身の行為(地)[の時]を離れて成道(草)はない[理会されない]からである、と言うようである。

＊

[1-5-A] しかあるを、仏法をならはざる凡夫の時節にあらゆる見解は、有時のことばきくにおもはく、あるときは三頭八臂となれりき、あるときは丈六八尺となれりき。たとへば、河をすぎ、山をすぎしごとくなり。いまはその山河、たとひあるらめども、われすぎきたりて、いま玉殿朱楼に処せり、山河とわれと、天と地なりとおもふ。

しかあれども、道理この一条のみならず。いはゆる山をのぼり河をわたりし時にわれありき、われに時あるべし。われすでにあり、時さるべからず。時もし去来の相にあらずは、上山の時是有時の而今なり。時

もし去来の相を保任せば、われに有時の而今ある、これ有時なり。かの上山渡河の時、この玉殿朱楼の時を吞却せざらんや、吐却せざらんや。

[1-5-B] それなのに、仏法(仏の教え、生き方)を習い覚えない凡庸な人である時に見られる見解で、有る時という言葉聞いて思うのは、「有る時は頭三つ腕八つ[阿修羅]となっていたのです、有る時は立って一丈六尺坐って八尺[仏]となっていたのです。たとえば、河を過ぎ、山を過ぎて来たようにです」ということです。「今も、その山や河はあるはずですが、わたしは過ぎて来てしまって、今は、玉殿朱楼に処在しています、山や河とわたしと[では]、天と地です」と思うのです。

けれども、理解の仕方[道理]はこの一筋だけではありません。いわゆる山を上り河を渡った時わたしは有りました、[その]わたしには時が有るはずです。[その]わたしが[今]すでに有るのです、[ですから]時が去るはずがありません。時が、去ったり来たりする在り方をするのでなければ、山に上る[あの]時が、[わたしが現に]有る時であるこの今です。時が、去ったり来たりする在り方を保つのであれば、有る時であるこの今がわたしに有ります、これ[その両面]が有る時なのです。[去来しないと見える時は]あの上山渡河の時が、この玉殿朱楼の時を呑み込んでいたのではないのでしょうか、[去来すると見える時は][あの上山渡河の時が、この玉殿朱楼の時を]吐き出しているのではないのでしょうか。

[1-5-c] 行為するわたしと、わたしの行為と、それと一つのこととして生起している出来事の時とは別ではありえない。行為(出来事)(上山渡河)の時に行為するわたしが有り、行為する(上山渡河する)わたしにはその行為(出来事)の時が有る。今行為している(玉殿朱楼に処する)わたしが有るのだから、そのわたしから時が去ってしまっているはずがない。時が去来すると見えないのは、上山渡河の時(仏道修行して有る時)が[去らずに]、わたしが有る時であるこの今(玉殿朱楼の時)(仏であることを実証して有る時)を呑み込んでいたからである。時が去来すると見えるのは、上山渡河の時(仏道修行して有る時)が[去らずに]、わたしに有る時であるこの今(玉殿朱楼の時)(仏であることを実証して有る時)を吐き出しているからである。そのいずれもが、仏道修行し仏であることを実証して有る時の一つの位相(一経)である、と言うのだろう。

＊

[1-6-A] 三頭八臂はきのふの時なり、丈六八尺はけ

ふの時なり。しかあれども、その昨今の道理、ただこれ山のなかに直入して、千峰万峰をみわたす時節なり、すぎぬるにあらず。三頭八臂もすなはちわが有時にて一經す、彼方にあるにたれども而今なり。丈六八尺もすなはちわが有時にて一經す、彼処にあるにたれども而今なり。

[1-6-B] 頭三つ腕八つ〔阿修羅〕〔で有るの〕は昨日の時です、立って一丈六尺坐って八尺〔仏〕〔で有るの〕は今日の時です。けれども、そのように昨日とか今日とか言ってみても、その意味するところ〔道理〕は、ただまっしぐらに山の中に入り、千万の峰々を見渡す時のことで、過ぎ去るわけではないのです。〔一方〕頭三つ腕八つ〔阿修羅〕〔で有るの〕もわたしの有る時であって〔わたし自身が〕経っているのです、彼方〔離れた時〕に有るようですがこの今なのです、〔また一方〕立って一丈六尺坐って八尺〔仏〕〔で有るの〕もつまりわたしの有る時であって〔わたし自身が〕経っているのです、彼処〔別の時〕に有るようですがこの今なのです。

[1-6-C] 仏道修行する行為（三頭八臂）と、修行の力量の実証（丈六八尺）は、同時に生起する一つの出来事である、修行の時すでに実証は到来し、実証の時にも修行は去り行かない。仏道修行者は、この同じ今の有る時に、その一面で修行（彼方に見える）（三頭八臂）の時を生き（一經し）、また一面でその実証（彼処に見える）（丈六八尺）の時を生き（一經し）ているのだ、と言うのだろう。

*

[1-7-A] しかあれば、松も時なり、竹も時なり。時は飛去するとのみ解会すべからず、飛去は時の能とのみは学すべからず。時もし飛去に一任せば、間隙ありぬべし。有る道の道を経聞せざるは、すぎぬるとのみ学するによりてなり。要をとりていば、尽界にあらゆる尽有は、つらなりながら時々なり。有るなるによりて吾有時なり。

[1-7-B] ですから、松〔として有るの〕も時です、竹〔として有るの〕も時なのです。時は飛び去ると理解するだけではいけません、飛び去るのが時の働きだと学ぶだけではいけません。時がもし飛び去るだけだということになれば、隙間が有るはずです。有る時という言葉を経〔仏の言葉〕として聞かないのは、過ぎ去るとしか学ばないからです。つまり、全世界に有るすべてのものは、列なりながらその時々なのです。〔わたしが〕有る時なのですからわたしに有る時〔吾有時〕なのです。

[1-7-C] ものが有るのは或る時であり、時は或るものが有る時である。ものが有るのは、それが、わたしの行為と一つ出来事として、生起しているからである。行為するわたしが、自分自身の行為と一つのこととして生起している出来事を、それ自身で有るものとして排べ列ねて見ているのである。したがって、ものが有る時とは、行為するわたしが有る時であり、行為するわたしに有る時〔吾有時〕なのである、と言うようである。

2 有る時は経り歴る

[2-1-A] 有時に経歴の功德あり。いはゆる今日より明日へ経歴す、今日より昨日に経歴す、昨日より今日へ経歴す。今日より今日へ経歴す、明日より明日へ経歴す。経歴はそれ時の功德なるがゆゑに。

[2-1-B] 有る時には経り歴るという力量があります。いわゆる今日から明日へ経り歴るのです、今日から昨日へ経り歴るのです、昨日から今日へ経り歴るのです、今日から今日へ経り歴るのです、明日から明日へ経り歴るのです。経り歴るのが時の力量だからです。

[2-1-C] 「有る時」は、行為するわたしが有る時であり、行為するわたしに有る時である。問題は、行為するものと独立に流れ、時には現在から過去へ逆流することもありうる時間などではなく、出来事や、行為や、行為するものの経歴ないし歴史を可能にする時間なのだろう。

ハイデガーによれば、「歴史」が可能であるのは、行為する現在のわたしが、過去の自分を過ぎ去ってもうない自分として切り捨てるのではなく、すでに自分自身がそれであったことがある自分として現在の自分のうちに取り返すことができるからであり、未来の自分を未だ未来ない自分として切り離すのではなく、すでに自分自身がそこへと先駆けている自分として現在の自分へ走り帰ることができるからであり、そのような仕方、現に自分自身の行為において生起している世界の出来事へと現在することができるからである。⁽⁴⁾

行為するものの「経歴」が問題になるのも、過去の自分の行為と、かつて生起した出来事が、現在の自分の行為と、現に生起している出来事において、まだその力量を発揮しているからであり、未来の自分の行為と、やがて生起するであろう出来事が、現在の自分の行為と、現に生起している出来事において、すでにその力量を発揮しているからである。

それぞれの個人や共同体が、独自の歴史を経る（経歴する）（連なりながら時々である）ことができるのは、そ

れらが、すでにそれで有った過去の自分に走り戻り、今もなおそれ（有ったもの）で有る現在の自分に走り帰ることができるからであり、すでにそれで有りうる未来の自分に先駆け、今まさにそれ（有りうるもの）で有る現在の自分に走り来ることができるからだろう。

『有時』と同年（1240）の『伝衣』では、袈裟が正しく伝わることと、仏の正しい法（教え、生き方）が伝わることは一つのことであるとされ、「過去より現在に正伝し、現在より未来に正伝し、現在より過去に正伝し、過去より過去に正伝し、現在より現在に正伝し、未来より未来に正伝し、未来より現在に正伝し、未来より過去に正伝して、唯仏与仏の正伝なり」と表現されている。

『溪声山色』（1240）では、「仏祖にとっての過去はわたしたちです、わたしたちの未来は仏祖です」、「昔の仏も悟らないうちは現在の人と同じです、悟ってしまえば現在の人もそのまま昔の仏なのです」と言われている。

仏と同じように行為するものは、仏と同じ時を生きているのである。だから、現在のわたしたちが、すでに仏と同じように行為できているとすれば、その「現在」のわたしたち「から」、まだ仏として行為できるようになっていなかった「過去」の仏「に」、正しい法が「伝えられる」（けいれき経歴する）と言えるのである。現在のわたしたちも、仏と同じように行為できないうちは、過去の仏よりさらに過去の時を生きているのであり、すでに仏として行為できている過去の仏も、現在のわたしたちよりさらに未来の時を生きているのである。だから、「未来」の仏「から現在」のわたしたち「に」正しい法が「伝えられる」（けいれき経歴する）と言えるのである。⁽⁵⁾

このような仕方でも、仏道修行し、その力量を実証する活動を伝えるものたちの、同じ一つの共同体の歴史（たどりつたえ経歴）が可能になる、と言うようである。

*

[2-2-A] 古今の時、かさなれるにあらず、ならびつもれるにあざれども、青原も時なり、黄檗も時なり、江西も石頭も時なり。自他すでに時なるがゆゑに、修証は諸時なり。にゅうでいにつすい入泥入水おなじく時なり。いまの凡夫の見、および見の因縁、これ凡夫のみるところなりといへども、凡夫の法にあらず、法しばらく凡夫を因縁せるのみなり。この時、この有は、法にあらずと学するがゆゑに、丈六金身はわれにあらずと認ずるなり。われを丈六金身にあらざるとのがれんとする、またすなはち有時の片々なり、未証 拠者の看々なり。

[2-2-B] 古今の時、重なるのではありません、並び積もるのでもありませんが、青原さんも時です、黄檗さんも時です、江西さんも石頭さんも時です。自分もあの方たちもすでに時なのですから、修行するのも実証するのもそれぞれ時（諸時）なのです。〔圓吾の言う〕泥に入り水に入る〔衆生を救済する〕のも同じように時なのです。いま（仏道修行する）凡庸な人たちが見ていることも、その見方をもたらしもの（見の因縁）も、ともに、凡庸な人たちが見ていることなのですが、（仏道修行する）凡庸な人たちの〔真の〕在り方（真に起こっている出来事）（凡夫の法）ではありません、〔真の〕在り方（真に起こっている出来事）（法）がたまたま凡庸な人たちにそのように現れている（凡夫を因縁せる）だけなのです。〔凡庸な修行者たちは〕この時や、この有るものは、〔真の〕在り方（真に起こっている出来事）（法）ではないと学んでいるので、立って一丈六尺坐って八尺の金色のお身体〔仏〕は自分ではないと認めるのです。〔しかし〕自分は丈六の金身ではないと逃れようとしても、それがまたそのまま〔仏道修行に〕有る時の一片なのです。まだお分かりでない方は、しっかりと見て下さい。

[2-2-C] 仏道修行して有る時は、すでにそのまま、仏としての力量を実証して有る時である。したがって、仏道修行に生きるものは、すでに仏が有る時と同じ時を生きているのであり、凡庸な修行者に真に起こっていること（凡夫の法）もそのような出来事（仏として有ること）なのである。しかし、凡庸な修行者にはそれが見えないので、修行者（自分）と仏とは別であると見える時があるにしても、そのように見る人の有る時も、すでに、仏道修行に生きる時であるかぎり、仏として有る時の一こま（片々）にすぎない、と言うのだろうか。

*

[2-3-A] いま世界に排列せるむま・ひつじをあらしむるも、住法位の恁麼なる昇降上下なり。ねずみも時なり、とらも時なり、しやう生も時なり、ぶつ仏も時なり。この時、三頭八臂にて境界を証し、丈六金身にて境界を証す。それ境界をもて境界を界尽するを、きゆうじん究尽するとはいふなり。丈六金身をもて丈六金身するを、ほっしん発心・修行・菩提・涅槃と現成する、すなはち有なり、時なり。尽時を尽と究尽するのみ。さらにじやうほう剩法なし、剩法これ剩法なるがゆゑに。たとひ半究尽の有時も、半有時の究尽なり。たとひさこ蹉過すとみゆる形段も有なり。さらにかれにまかすれば、蹉過の現成する前後ながら、有時の住位なり。住法位の活鱗々地なる、こ

れ有時なり。無と動著すべからず、有と強為すべからず。時は一向にすぐるとのみ計功して、未到と解合せず。解会は時なりといへども、他にひかる縁なし。去来と認じて、住位の有時と見徹せる皮袋なし。いはんや透関の時あらんや。たとひ住位を認ずとも、たれか既得恁麼の保任を道得せん。たとひ恁麼と道得せることひさしきを、いまだ面目現前を横搦せざるなし。凡夫の有時なるに一任すれば、菩提・涅槃もわづかに去来の相のみなる有時なり。

[2-3-B] いま世界に排べ列ねている午や未[の時]が有るようにしているのも、それぞれの[独自の]在り方に住まる(住法位)のこのような[修行の時と実証の時の]上昇や下降なのです。子も時です、寅も時です、衆生も時です、仏も時なのです。この[仏道修行に有る]時が、頭三つ腕八つ[阿修羅]として世界全体を実証し、立って一丈六尺坐って八尺の金色のお身体[仏]として世界全体を実証するのです。世界全体で世界全体を[実証し]尽くす(界尽する)のを、究め尽くすと言うのです。丈六の金身で丈六の金身をする[仏が仏として有る]ことを、発心、修行、菩提、涅槃[の時]として実現するのです、[それが]つまり有ることなのです、時なのです。[行なう]時の全体を有るもの[生起する出来事]の全体として究め尽くすだけです。それ[時の全体]以外のものは有りません、それ以外のものはそれ[有るもの全体]以外のものだからです。たとえ、[有るものの]半ばを究め尽くす有る時であっても、半ばの有る時に究め尽くすのです。たとえ[究尽]仕損なっていると見える様子[の時]でも有るのです。さらにまったく[究尽]仕損うにまかせれば、仕損なうことが実現する前後[の時]もすべて、[仏道修行に]有る時でそれぞれの[独自の]在り方に住まっているのです(有時の住位なり)。それぞれの[独自の]在り方に住まって魚が泳ねるように生き生きしているのが[仏道修行に]有る時です。[時は]無いと動揺してはいけません、むりやり有るとしてはいけません。[そんな人は]時はひたすら過ぎ去るとだけ思い込んで、未だ到らないことを理解しないのです。[それを]理解するのは時ですが、[時には]それを引き起こす別の原因があるわけではないのです。[それなのに][時は]去ったり来たりすると認めて[いるだけで]、それぞれの[独自の]在り方に住まって有る時だと見徹すものはいないのです[そんな人は中身が空っぽな皮の袋にすぎません]。まして、[その理解の先へ]関門を透り抜ける時があるのでしょうか。たとえそれぞれの[独自の]在り方に住まっていること(住法位)を認めていると

しても、すでにこのようにして身につけることができたこと(保任)を誰が表現することができるでしょうか。たとえそうだと表現することがとくにできているにしても、[自分の]顔や目の前を手探りし[実体的な有るものや時をつかまえようとし]ない人はいまだにいないのです。凡庸な人たちが有る時とするものだけだとすれば、菩提も涅槃も、ただ去ったり来たりする在り方をする有る時で[あることになりま]す。

[2-3-C] 午の刻は午の刻独自の在り方に住まり、未の刻は未の刻独自の在り方に住まっている。午の刻が去り未の刻が来るのではないが、未の刻が午の刻に並び列なっている。修行の時が去り、仏の時が来るのではないが、修行者として力量を実証する独自の出来事(世界)の時が有り、仏として力量を実証する独自の出来事(世界)の時が有る、と言うようである。

「世界を実証する」とは、修行者としての力量を実証する出来事として、世界を確認する(世界に生きる)(あるいは住まう)ことだろうか。

「半ばを究め尽くす有る時でも、半ばの有る時に究め尽くすのである」と言う。この「半ば」は、行為(仏道修行)と、そこに生起する出来事(仏であることの実証)が、互いに同じ「一つの」出来事の「半ば」であると言うようである。[3-4]では、「伊揚眉瞬目也半有時」(あの方に揚眉瞬目させるのは半ばの有る時である)と言われている。

「世界全体で世界全体を世界として[実証し]尽くす」ことが「究め尽くすことである」とされている。行為するものが、その行為と一つのこととして生起している出来事を、「自己と別のものと認めない」ことは、当然のことである。しかし、究めるものと、究められるものは別であるはずだと考える人からすれば、これは、究尽「仕損なう」ことである。その意味で、「たとえ[究尽]仕損なう(蹉過する)(見錯まれる)時でも[仏道修行に]有る時である」と言うようである。[3-4]では、「教伊揚眉瞬目也錯有時」(あの方に揚眉瞬目させるのは錯まって有る時である)、「不教伊揚眉瞬目也錯々有時」(あの方に揚眉瞬目させないのは錯まりに錯まって有る時)と言われている。

「たとひ蹉過すとみゆる形段も有なり。さらにかれにまかせれば、蹉過の現成する前後ながら、有時の住位なり」の「かれ」は、指示代名詞の対象は可能なかぎり近接する表現に求めるものとすれば「蹉過」で、「さらにかれにまさせる」時とは、「錯まりに錯まって有る時」を言うのだろう。

「解会は時なりといへども、他にひかる縁なし」

とは、「時」というものは、「午の時^{うま}が去ると、そこに隙間^{ひつじ}ができ、それを埋めるために、未の時^{ひつじ}が、自分とは別の原因（すでに去ってもうない午の時^{うま}）に引かれるようにして来るわけではない」と言うのだろうか。

「法位」ないし「住法位」は、漢訳『法華経』の「是法住法位」に由来し、「是れが法の住であり、法の位である」（これが縁起の法の住まり方であり、位り方である）と読まれることもある。ここでは、「法はその法の位に住する」と読まれ、「存在するものはそれぞれの〔独自の〕在り方（法位）に住まる」、「存在するものは、互いに実体的に区別されるものとして存在するわけでも、一方が去って他方が来るわけでもないが、それぞれ独自の出来事として生起している」と言うようである。

「時が有であり、有が時である」と言えるのは、「時」が、「自己自身と同一の実体的なものが存在している時」ではなく、「自己自身と差異している出来事が起こっている時」であるからだろう。行為と、それと一つのこととして生起している出来事とは、したがって、また、仏道修行と、仏であることの実証とは、互いに同じ一つの出来事の「半ば」（半有時）であるかぎり、実体的に別のものとしては確認「仕損なわれる」（見錯^{あや}まれる）にしても、それぞれが独自の出来事として生起し、独自の力量を発揮している（法位に住している）と言うのだろうか。

「既得恁麼」は、『恁麼』（1242）に、「直趣無上菩提、しばらくこれを恁麼といふ」と言われていることから、「この上ない目覚めに直通することを既に得ている」とする理解もあるが、『有時』（1240）より後年で、ここには特別な指示もないことから、それには従わない。ただし、「すでにこのようにして身につけることができたこと」（既得恁麼の保任）（有時が去来するのではなく住位すると認めること）が、内容的に「直趣無上菩提」と一致することをさまたげない。

＊

[2-4-A] おほよそ、籬籠^{らろう}とどまらず有時現成^{ゆうじげんじょう}なり。いまの右界に現成し左方に現成する天王天衆、いまもわが尽力する有時なり。その余外にある水陸の衆有^{じんりき}時、これわがいま尽力して現成するなり。冥陽^{めいよう}に有時なる諸類^{しよちよう}諸頭、みなわが尽力現成なり、尽力経歴^{きやうりやく}なり。わがいま尽力経歴にあらざれば、一法一物も現成することなし、経歴することなしと参学すべし。

[2-4-B] そもそも、籬^{あみ}や籠^{かご}が止まるのではありません、有る時が実現しているのです。いま右の世界に実現し左の方に実現する天上界の王やその住人たちは、

今もわたしが力を尽くして有る時なのです。それ以外の水中や陸上の有る時もすべて、わたしが今力を尽くして実現しているのです。眼に見える世界に、あるいは、眼に見えない世界に有る時であるあらゆる種類のあらゆるものたちも、すべてわたしが力を尽くして実現しているのです、[わたしが]力を尽くして経^{たど}り歴^{めぐ}るのです。わたしが今力を尽くして経^{たど}り歴^{めぐ}るのでなければ、何一つとして実現するものはなく、経^{たど}り歴^{めぐ}ることにはないと（修行の場に^{まみ}参^まりて学ばなくてははいけません。

[2-4-C] 「籬^{あみ}や籠^{かご}が止まらない」とは、「それ自身と差異する出来事を捕獲し取り籠^{とど}める実体的なものが固定的に存在する（止まる）わけではない」ということで、「籬^{あみ}や籠^{かご}が止まるのではなく、有る時が実現しているのだ」とは、「固定した自己同一な実体的なものが存在しているのではなく、それ自身と差異する出来事が生起しているのだ」ということだろう。

出来事が、わたしの行為（止まらない籬^{あみ}や籠^{かご}）において、それと一つのこととして生起していることが、「わたしが力を尽くして実現している」と語られているようである。わたしの行為と一つのこととして生起する出来事は、わたしが力を尽くす行為^{たど}が経^{たど}り歴^{めぐ}ることなしには、経^{たど}り歴^{めぐ}らない、と言うのだろうか。

「籬^{あみ}」は「罫^{あみ}する」（ひっかける）もの、「籠^{かご}」は「罫^{あみ}する」（さまたげる、^{とど}める）もので、「籬籠^{らろう}」は、[3-3]の「罫^{あみ}する」ものに対応すると考えられる。「籬^{あみ}」を「あみ」と理解するようであるが、「あみ」は本来「羅」で、「籬^{あみ}」の本義は「箕（み）」である。

＊

[2-5-A] 経歴^{きやうりやく}といふは、風雨の東西するがごとく学しきたるべからず。尽界は不動転なるにあらず、不進退なるにあらず、経歴なり。経歴はたとへば春のごとし。春には許多般の様子あり、これを経歴といふ。外物なきに経歴すると参学すべし。たとへば、春の経歴はかならず春を経歴するなり。経歴は春にあらざれども、春の経歴なるがゆゑに、経歴いま春の時に成道せり。審細^{さんさい}に参来^{さんらい}参去^{さんこ}すべし。経歴をいふに、境は外頭^{ちやう}にして、能経歴の法は東にむきて百千世界をゆきすぎて、百千万劫をふるとおもふは、仏道の参学、これのみを専一にせざるなり。

[2-5-B] 経^{たど}り歴^{めぐ}るとは、雨や風が東西〔に移動〕することだというように学んできたのはいけないのです。世界全体が動き転ずることがないわけではありません、進み退くことがないわけではありません、経^{たど}り歴^{めぐ}るのです。経^{たど}り歴^{めぐ}るとは、たとえば春のようです。

春にはたくさんの方があります、これを経り歴るといいます。[春の] 外部があるわけではないのですが、経るのだと（修行の場に）^{まみ}参えて学ばなくてはなりません。たとえば、春の経る歴りは春を経り歴るので、[すべての] 経る歴りが春なのではありませんが、春の経る歴りなのですから、経る歴りは今、春の時にその道を実現する[成道する] のです。繰り返して繰り返して（修行の場に）^{まみ}参え、詳しく審らかにしなくてはなりません。経る歴りについて語るとき、経る歴るところが外部にあって、そこを東に向かって百千もの世界を通りすぎ、百千万劫もの時間を経る（経るし通過し）ゆくのだと思うのは、仏道を（修行の場に）^{まみ}参えて学ぶことだけに専心しない[からな] のです。

[2-5-c] 行為や、それと一つのこととして生起している出来事のほかに、行為する主体が、実体的なものとして存在するわけではない。「経る歴る」ことも、「経るし通過する」働きの主体が実体的に存在し、それが自分とは別の外部の空間を「経るし通過する」ことだと考えてはいけません。「春の経る歴る」も、「経る歴る」主体として春が実体的に存在し、それが「経る歴る」ことではない。春が「経るし通過する」空間が、春の外部（夏、秋、冬）に、春とは別に存在するのではない。かりに「春が」経るし通過するにしても、それは、その春「自身を」経るし通過するのである。春の「経る歴る」は春の時に実現するのである。仏道修行者は、仏道修行の時にすでにその力量を実証している（成道している）のであって、仏道修行を行き過ぎた、その彼方に、仏であることを目指しているわけではない、と言うのだろうか。

3 半ば有る時、錯まって有る時

[3-1-A] 薬山弘道大師、ちなみに無際大師の指示によりて江西大寂禅師に参問す、「三乗十二分教、某甲^{そうし}ほぼその宗旨をあきらむ。如何是祖師西来意」。

かくのごとくとふに大寂禅師いはく、

有時教伊揚眉瞬目、

有時不教伊揚眉瞬目。

有時教伊揚眉瞬目者是、

有時教伊揚眉瞬目者不是。

薬山きて大悟し、大寂にまうす、「某甲かつて石頭にありし、蚊子の鉄牛にのぼれるがごとし」。

[3-1-B] 薬山の弘道大師は、あるとき無際大師の指示によって、江西の大寂禅師（の修行の場に）^{まみ}参えて、「わたくしは、三つの乗りものと十二部門の教えの大切な意味をほとんど明らかにしています[いるつもりで

す][が]、祖師[開祖の師、達磨]が西方から来られた意味は何でしょうか」、と問われました。

このように問われ大寂禅師は、

有る時はあの方（達磨）に眉を揚げさせ目を瞬かせます、

有る時はあの方（達磨）に眉を揚げさせ目を瞬かせません。

有る時はあの方（達磨）に眉を揚げさせ目を瞬かせるのが是だとします、

有る時はあの方（達磨）に眉を揚げさせ目を瞬かせるのが是だとはいしません。

と言われました。

薬山さんはこれを聞かれ、からりと悟られて、大寂さんに、「わたくしはかつて石頭さんのもとにいましたが、蚊が鉄の牛を^{のぼ}上っているようでした」と申されました。

[3-1-C] 霊鷲山上で無言のうちに花を拈って瞬いた釈迦に迦葉（カーシャパ）だけがその意を解して無言のうちに微笑みかえしたことをもって伝法の至極とする「拈花瞬目、破顔微笑」の故事が、達磨が中国へ来られた意義においても問い返されているのだろう。

「揚眉瞬目」は、いわゆる「以心伝心、教外別伝」を意味するようだが、「仏道修行するすべての行為（三乗十二分教）において、それと一つの出来事として仏であることが実現している」と考えるなら、「如何是祖師西来意」（どれを祖師西来の意とするのですか）を、[三乗十二分教は]「どれも祖師が西来された意味なんですよ」と読むこともできるだろう。

有る時は、「教伊揚眉瞬目」（すでに仏であることを実証している指導者として仏道修行者を導くこと）ばかりでなく、また、有る時は、それと一つの出来事である「不教伊揚眉瞬目」（すでに仏であることを実証している指導者がみずから仏道修行すること）も、達磨が西来された意味である、という理解だろうか。

*

[3-2-A] 大寂の道取するところ、余者とおなじからず。眉目は山海なるべし、山海は眉目なるゆゑに。その「教伊揚」は山をみるべし。その「教伊瞬」は海を宗すべし。「是」は「伊」に慣習せり、「伊」は「教」に誘引せらる。「不是」は「不教伊」にあらず、「不教伊」は「不是」にあらず、これらともに有るなり。

山も時なり、海も時なり。時にあらざれば山海あるべからず、山海の而今に時あらずとすべからず。時もし壊すれば山海も壊す、時もし不壊なれば山海も不壊なり。この道理に、明星出現す、如来出現す、眼睛

出現す、拈花出現す。これ時なり。時にあらざれば不
 恚麼なり。

[3-2-B] 大寂さんが言われることは、他の人たちと
 同じではありません。眉や目は山や海であるはずで
 す、山や海は眉や目であるはずだからです。その「あ
 の方に揚げさせる」は山を見るはずで、その「あ
 の方に瞬かせる」は海を一望するはずで、^{これ}「是だと
 する」のは「あの方」[達磨]が慣れ習っていること
 で、^{これ}「あの方」が「させる」に誘い引かれるて
 いるのです。「是だとしない」のは「あの方にさせない」
 のではないのです、「あの方にさせない」のが^{これ}「是だと
 しない」ではないのです、そのどれもが有る時な
 のです。

山も時です、海も時です。時でないのなら山も海も
 有るはずがありません、山や海の今ここに時が無いと
 してはいけません。かりに時が壊滅すれば山も海も壊
 滅します、時が壊滅しなければ山も海も壊滅しま
 せん。このような道理で、[釈迦成道時の]明星が出現し、
 如来が出現し、[瞬目する]眼の玉が出現し、花を拈
 することが出現するのです。これは時です、時でなければ
 こうはなりません。

[3-2-C] 山や海は、眉を揚げ目を瞬く行為（時）に
 おいて、それと一つのこととして生起する出来事であ
 り、そこに山を見、海を一望する行為も成立するの
 である。揚眉瞬目することを是とすることは達磨が慣
 れ習っていることであり、意識的に是としない（不是）
 の時も、揚眉瞬目しないわけではない。教の時も不教
 のときも、是の時も不是の時も、仏道修行の時であ
 り、その時が有る（不壊である）かぎり、仏であることを
 実証する出来事が生起している（山海は有る）、と言
 うようである。

*

[3-3-A] 葉県の帰省禪師は臨済の法孫なり、首山の
 嫡嗣なり。あるとき大衆にしめしていはく、

有時意到句不到、
 有時句到意不到。
 有時意句兩俱到、
 有時意句俱不到。

「意」「句」ともに有時なり、「到」「不到」ともに
 有時なり。到時未了なりといへども不到時来なり。意
 は驢なり、句は馬なり。馬を句とし、驢を意とせり。
 「到」それ来にあらず、「不到」これ未にあらず。有時
 かくのごとくなり。到は到に^{けい}壘礙せられて不到に^{けい}壘礙
 せられず。不到は不到に^{けい}壘礙せられて到に^{けい}壘礙せられ
 ず。意は意をさへ、意をみる。句は句をさへ、句をみ

る。礙は礙をさへ、礙をみる。礙は礙を礙するなり、
 これ時なり。礙は他法に使得せらるといへども、他法
 を礙する礙いまだあらざるなり。我逢人なり、人逢人
 なり、我逢我なり、出逢出なり。これらもし時をえざ
 るには、恚麼ならざるなり。

又、意は現成公案の時なり、句は向上関捩の時な
 り。到は脱体の時なり、不到は即此離此の時なり。か
 くのごとく辨肯すべし、有時すべし。

[3-3-B] 葉県の帰省禪師は、法（仏法の継承）の上で
 は臨済さんの孫で、首山さんの直系の後嗣ぎです。有
 る時、修行者の集まりで示して、

有る時は、意は到るが、句は到らない
 有る時は、句は到るが、意は到らない
 有る時は、意と句の二つ、ともに到る
 有る時は、意と句、ともに到らない

と言われました。

意（思い）も句（表現）もともに有る時です、到る
 （達成されるの）のも到らない（達成されない）のもとも
 に有る時です。到る時が未了ららないのに到らない時
 が来ているのです。意というのは[驢事未了馬事到来の]
 驢のことです、句とは馬のことです。馬を句とし、驢
 を意とするのです。到ると言っても来るのではありません
 せん、到らないと言っても未だ（来ないの）ではあり
 ません。[仏道修行に] 有る時は、このようであるの
 です。到るが到る（自身）に^{けい}壘けられ礙げられるので
 すが、到らないに^{けい}壘けられ礙げられるのではありません
 せん。到らないが到らない（自身）に^{けい}壘けられ礙げられ
 るのですが、到るに^{けい}壘けられ礙げられるのではありません
 せん。意が意（自身）をさまたげて、意を見るのです。
 句が句（自身）をさまたげて、句を見るのです。礙げ
 が礙げ（自身）をさまたげて、礙げ（自身）を見るので
 す。礙げが礙げ（自身）を礙げるのです、これが[仏道
 修行に] 有る時なのです。礙げは他のものに使われる
 のですが、[仏道修行に有る時は] 他のもを礙げる礙げ
 は有ったことはありません。わたしが人に逢うので
 す、人が人（自身）に逢うのです、わたしがわたし（自
 身）に逢うのです、出るが出る（自身）に逢うのです。
 もし時を得られないなら、このようにはいきません。

また、意は実現しているものが真実である（現成が
 公案である）時です、句はその[仏であることの実証の]
 先に行くことが要の働きである（向上が関捩である）時
 です。到るとは脱け落ちた身体（脱体）[身心脱落]の
 時です、到らないとは[馬祖の言う]此に即して用い此
 を離れて用いる（即此が離此である）時です。このよう
 に身をもって理解し、[仏道修行に] 有る時にしなければ

ばいけません。

[3-3-c]「意」とは、「実現しているものが真実である」(現成が公案である)時であり、修行のうちに仏であることを実証する時である。「句」とは、「その[仏であることの実証の]先を行くことが要の働きである」(向上が関捩である)時であり、仏としてなお修行する時である。「到る」とは、修行する「脱け落ちた身体」(脱体)[身心脱落]において仏であることを実証する時であり、「到らない」とは、仏であることの実証に「即する」(即此)ことが同時に「それを離れて」(離此)修行することである時である。

したがって、(仏道修行に)有る時は、意が到(現成公案が脱体)であり、句が不倒(向上関捩が即此離此)である時である[有時意到句不到]。また、(仏道修行に)有る時は、句が到(向上関捩が脱体)であり、意が不倒(現成公案が即此離此)である時である[有時句到意不到]。

さらに、(仏道修行に)有る時は、意も句も俱に到(現成公案も向上関捩も脱体)である時である[有時意句俱到]。また、(仏道修行に)有る時は、意も句も俱に不倒(現成公案も向上関捩も即此離此)である時である[有時意句俱不到]。

こうして、意も句(現成公案も向上関捩)も、(仏道修行に)有る時である。到も不到(脱体も即此離此)も、(仏道修行に)有る時である。到(脱体)の時が未だ了らないうちに、不倒(即此離此)の時が来ているのである[到時未了不到時来]。意(現成公案)の時が未だ了らないうちに、句(向上関捩)の時が来ているのである[意時未了句時来]。なぜなら、到るとは来ることではなく(脱体のことであり)、到らないも来ないことではない(即此離即のことであり)からである。

望礙する(望け礙げる)とは、仏道修行する人が、自己自身の行為と、その行為と一つのこととして生起している出来事のうちに、自己自身を蔵し切り、そこに自己自身を見ていることを言うようである。たとえば、『山水経』(1240)では、「山も宝にかくるる山あり、沢にかくるる山あり、空にかくるる山あり、山にかくるる山あり。蔵に蔵山する参学あり。古仏云、『山是山、水是水』。この道取は、やまこれやまといふにあらず、山これやまといふなり。」と言われている。「山是山」は、自己自身と同一な実体的なものが、「自己自身と同一である」ことを言うトートロジーではない。行為するもの(山)は、その行為と一つのこととして生起する出来事(山)のうちに蔵れきり、この行為において生起する出来事(山)は、それと一つの出来事として生起する行為するもの(山)のうちに蔵れ

きるのである。山が山に蔵れ、その蔵れることにおいて蔵れる山自身が成立していると言うのだろう。(6)「礙げが礙げを礙げる」(礙は礙を礙するなり)という表現も、この「蔵す」ことの徹底(蔵が蔵を蔵する)を表わすようである。蔵すと言えば、他のものによって(に使得せられて)蔵されると考えられる。しかし、仏道修行において有る時は、自分自身と別のものを覆い蔵すことはない(他法を礙する礙いまだあらざるなり)。仏であることの実証を自分自身の仏道修行のうちに望礙している(蔵しきっている)人は、自分自身の仏道修行と別のものとしては、仏であることの実証を「見錯まっている」(蹉過している)のであり、またその逆でもあるわけである。

三聖には、「わたしは[道を求める]人に逢えば出て行くが、その人のために法を説かない」(我逢人即出、出即不為人)、興化には、「わたしは人[道を求める]に逢っても出て行かない、出ればその人のために法を説くことになる」(我逢人即不出、出則便為人)という言葉があるようである。「我逢人」は、「仏道修行しているわたしは仏道修行(において仏であることを実証)している人に逢っているのである」、「人逢人」は、「仏道修行している人は仏道修行(において仏であることを実証)している人(その人自身)に逢っているのである」、「我逢我」は、「仏道修行しているわたしは仏道修行(において仏であることを実証)しているわたし自身に逢っているのである」と言うようである。

「出逢出」は、「仏であることを実証している人が仏道修行している人に逢うために出て行くとしても、その人(出て行く人)は別の人に逢っているのではなく、仏道修行(において仏であることを実証)している自分自身(出て行く人)に逢っているのである」と言うのだろうか。

「公案」の原義は、「公府の案牘」で、「案」は「考え」や「調べ書き」、「牘」は「文字を記す木の札」や「書き物」とされ、ここから、「公案」は、「誰もがゆるがせにできない絶対的な行動様式」、「存在するものがあるべき(それであるはずの)真実の在り方を提示するもの」を意味するようである。『現成公案』(1233)も、「現成している公案」ないし「現成が公案である」と読まれ、「公案は実現している」、「実現しているものが公案である」と理解される。「存在するものは現にある在り方そのものにおいて真実の在り方を實現している」(諸法は実相である、諸法は仏法である)という意味で、「仏道修行するものは、その行為においてすでに、仏であることを実証している」と言

うようである。

「関振」は(機)「関」(からくり)を作動させる「振」(振りの振し)で、出来事に決定的な転回をもたらす要の働きを意味するのだろう。

*

[3-4A] 向來の尊宿ともに恁麼いふとも、さらに道取すべきところなからんや。いふべし、

意句半到也有時、
意句半不到也有時。

かくのごとくの参究あるべきなり。

教伊揚眉瞬目也半有時、
教伊揚眉瞬目也錯有時、
不教伊揚眉瞬目也錯々有時。

恁麼のごとく参来参去、参到参不到する、有時の時なり。

正法眼蔵有時第二十

仁治元年庚子開冬日書于興聖宝林寺
寛元癸卯夏安居書写 懷辨

[3-4B] これまでの尊い方々はどなたもこのように言われていますが、さらに言うべきことがあるのではないのでしょうか。こう言わなければなりません。

意と句が半ば到るのも有る時です

意と句が半ば到らないのも有る時です

このように(修行の場に)参え究明しなければなりません。

あの方に眉を揚げ目を瞬かせる時は半ば有る時です

あの方に眉を揚げ目を瞬かせる時は錯まって有る時です

あの方に眉を揚げ目を瞬かせない時は錯まりに錯まって有る時です

このように(修行の場に)参え来たり参え去り、参え到り参え到らないのが、[仏道修行に]有る時である時なのです。

正法眼蔵、第二十卷、有時

仁治元年庚子(1240)、冬の始めの日、興聖宝林寺で書く。

寛元癸卯(1243)、夏の合宿修行時に書き写す
懷辨

[3-4C] 道元自身は、帰省禅師の詩に添えて、

「意」[仏道修行のうちに仏であることを実証する](現成公案)と、「句」[仏であることの実証を超え仏として仏道修行する](向上関振)が、「到る」[仏道修行する身体を脱落して仏であることを実証する](脱体)の「半ば」であるのも、[仏道修行に]有る時である。

「意」[仏道修行のうちに仏であることを実証する](現成公案)と、「句」[仏であることの実証を超え仏として仏道修行する](向上関振)が、「到らない」[仏であることの実証に即しながら離れる](即此離此)の「半ば」であるのも、[仏道修行に]有る時である。

と言い、大寂禅師の詩に添えて、

あの方[達磨]に眉を揚げ目を瞬かさせ[修行者を導かせ]るのは、半ば[仏道修行に]有る時である。

あの方[達磨]に眉を揚げ目を瞬かせ[修行者を導かせ]るのは、錯まって[仏道修行に]有る時である。

あの方[達磨]に眉を揚げ目を瞬かせ[修行者を導かせ]ないのは、錯まりに錯まって[仏道修行に]有る時である。

と言う。

意(現成公案)と、句(向上関振)が、到(脱体)の「半ば」であり、不到(即此即離)の「半ば」であるのは、仏道修行と仏であることの実証が、行為とそこに生起する出来事として、ともに同じ「一つの」出来事の「半ば」であるからなのだろう。

仏道修行に有る時が、「錯まって」有る時であるのは、仏道修行と一つのこととして生起する仏であることの実証は、仏道修行と実体的に別なものとは見られない(見錯まれる)(見損なわれる)(蹉過する)からだろう。

「不教伊揚眉瞬目」が、「錯まりに錯まって」有る時であるのは、仏であることの実証が、仏道修行と「見錯まれて」有る時[仏道修行と一つの出来事として生起している時](脱体の時)は、同時に、仏道修行が、仏であることの実証と「見錯まれて」有る時[仏であることの実証と一つの出来事として生起している時](即此離此の時)である(錯々有時である)からだろう。

注・参考文献

- 1) 矢島忠夫、正法眼蔵『仏性』(上)、弘前大学教育学部紀要101、2009
- 2) テキストは、道元『正法眼蔵』第二卷、水野弥穂子校注、岩波文庫、1990。(「ふりがな」は新仮名遣いにあらため、また、煩瑣にならないように努めた。)
- 3) 現代文は、①道元禅師全集第三卷、『正法眼蔵』3、水野弥穂子訳注、春秋社、2006、②道元『正法眼蔵』第1卷、増谷文雄訳注、講談社学術文庫、2004、③『正法眼蔵を読む』3、春日佑芳訳注、ペリカン社、1999、を参照した。
- 4) 矢島忠夫、M. ハイデガーにおける有限な時間と無限な時間、弘前大学教育学部紀要81、1999

5) 矢島忠夫、『正法眼蔵』における時間、弘前大学教育学部紀要97、2007

6) 矢島忠夫、正法眼蔵『山水経』、弘前大学教育学部紀要103、2010

7) 中村元『広説佛教語大辞典』、東京書房2002を参照した。

(2010. 7.29受理)